

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第488号 2022年11月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

脳科学と教育のまち小野市 「音読」と「対話」を大事にして

室田 真弓

吉永幸司先生にお世話になって
いる兵庫県小野市の取組の一端を
紹介させていただきます。

小野市は、平成十七年より世界
的な脳科学の権威である、東北大
学の川島隆太教授（小野市教育行
政顧問）に、子育てや教育につい
て、脳科学の研究データをもとに、
様々な助言をいただいています。

私たちのこの裏側あたりに、
「前頭前野」という脳の指令
塔に当たる大切な部分がありま
す。ここを健康に育てることが、
教育の目的であると言われていま
す。

「ものを覚える力」「考える力」「学
ぶ力」などの学習面だけでなく、
「がまんする力」「コミュニケーション

ーションする力」「他となかよく
する力」など、子ども達の心の育
成にも関わっています。前頭前野
を鍛える方法を子ども達のみなら
ず、市全体で保護者や地域にも発
信し続けています。

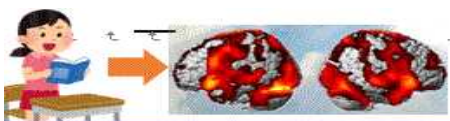
3・4歳までの、脳が爆発的に
発達する時期に、就学前の家庭教
育の充実。10歳までの、脳がゆる
やかに成長する受け入れの時期に
基礎学力の定着「おの検定」。10
歳を境に飛躍する、大人の脳の成
長期には、「自立」に向かう「小
中一貫教育」の取組など、脳の発
達に応じた教育施策を行っていま
す。

毎年11月頃に川島教授にお越し
頂き、10歳になった市内の全小学

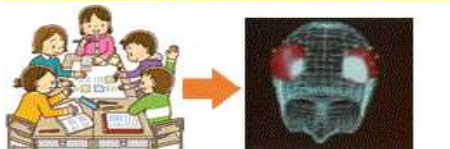
5年生を対象に体験型の実証実験
を見せて頂いています。「漢字」「計
算」「音読」「コミュニケーション」
をとっている時の脳の状態が大き
なスクリーンにライブで映し出さ
れ、子ども達は驚きます。左の図
は、音読をしている時、友達と話
している時（対話）の、脳の状態
です。前頭前野をはじめ大脳のあ
らゆる所が真っ赤に活性化してい
ます。

「脳科学と教育のまち」として、
国語科では、声に出して唱える「音
読」や友だちとコミュニケーション
を取りながら話す「対話」を大
事にしながら、授業を展開してい
るところです。

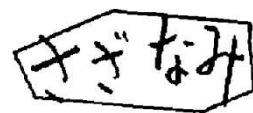
（兵庫県小野市立小野小学校長）



「音読」をしている時の脳の状態



「対話」をしている時の脳の状態



▼多くの仕事でAI
（人工知能）にとっ
て代わられつつある
現代、見直すべきは
「人間だからこそで
きること」という時
代になり、想像力の
大事さ考えることが
多くなりました▼想

像力を考える身近な教材に下村健
一さんの「想像力のスイッチを入
れよう」（光村図書・5年）があ
ります。下村さんは、「切り取ら
れた情報だけから全体を判断した
ことによる思い込み」の危うさを
指摘し、頭の中で「想像のスイッ
チを入れることの大切さ」を指摘
しています▼「思い込み」とい
言葉で切り取れば、学校の日常は
多くのトラブルの原因にもなっ
ていることがあります。3人仲良し
が2人と1人になれば「仲間外れ」
になったと思ひ込む。自分の言っ
たことは全部分かってもらったと
考えている等を事例は次々と浮か
んできます▼想像力を育てる始ま
りは「事実」を正しく捉えること
だと考えています。これは簡単な
ようではなかなかできないこと
です。つまり、「思い込み」の大き
さは働くからです。「思い込み」
を乗り越えるには、少し間をおい
て自問自答ができること、出来ご
との先を考えるという力が必要だ
からです▼「想像力」を育てる始
まりは、事実を言葉にできること
であろうと思っています。「想像
力」と「思い込み」は、言葉の力
とも関わりがあるからです。

（吉永幸司）

学校司書との連携
川部 長人

子どもたちの読書活動を広げるために、学校司書と連携してブックトークを行った。今回は『注文の多い料理店』（東京書籍・五年生）の学習後、「宮沢賢治の世界へようこそ」というテーマでブックトークを行っていただいた。『注文の多い料理店』では、物語をおもしろくしている表現の工夫について学習した。学習したことをもとに「オノマトペ」「不思議な言い回し」「音のひびき」「比喩表現」「宮沢賢治の考え方」のポイントをもとに、『よだかの星』や『風の又三郎』など宮沢賢治の他の作品について紹介してもらった。『風の又三郎』の「どつどつ」とどうどつとどうどつとどうどつという表現は聞いたことがある子どもも何人かおり、学校司書の後に続いてみんなで楽しく音読した。

閉会式で大竹しのぶさんや福島県の子どもたちが歌っていた歌である。それを聞いた子どもたちは「東京オリオンピククの閉会式でも流れて代表しているみたいですよ！」という声があった。多くの子どもたちが東京オリオンピククの閉会式を見ており、そこで『星めぐりの歌』聞いていたが、宮沢賢治が作った歌だと知ったことにより、宮沢賢治への興味関心がとても高まった瞬間でもあった。ブックトークを終え、子どもたちからは「題名を聞いたことがあっても読んだことがない」という声があり、宮沢賢治の他の作品への読書の意欲を高められたように思える。私自身あらためて学校司書との連携の大切さを実感した。学校司書は本に対する専門家であり、子どもたちの読書活動を推進していくためには欠かすことのできない存在である。今後も学校司書と連携して、子どもたちの読書活動を広げていきたい。
(東近江市立能登川南小学校)



「天までとどけ、
一、二、三」
川端 大介

十月末に行われた運動会では、一年生の子どもたちが玉入れとダンスに取り組んだ。運動会学習を通して、元氣・やりきるといった二つの力を高めることを学習のめあてとして学習を進めた。玉入れやダンスでは身体いっぱい玉を投げたり踊ったりする姿が見られ、子どもたちの成長が多く見られた。さて、そんな運動会学習中に物語文『くじらぐも』を学習した。元氣いっぱい学習した様子を伝えようと思う。

どスラスラ読めなくて困っていると答えた児童もいた。学習活動の中心に据えたのは、音読である。教師の範読、追い読み、交代読み、ペア読み、グループ読み、ダウト(間違ひ)読み等、変化をつけながら読み進めた。これまでの物語文を学級で音読した動画を見返し、声の大きさや速さに変化をつけて読むことができていた自分たちの姿を見て満足気な様子が見られた。今回の学習では、八、九ページを学級でキラキラ読んでほしいという思いがあった。そこには繰り返し読みの表現が出てきており、子どもたちが既習の知識を用いて読みを工夫したいと思うだろうと予想していた。「お話の中で、工夫することでも楽しく読めるページがあります。どのページですか。」と子どもたちに問うた。この問いによって、繰り返し出てくる会話文が出てくる八、九ページを工夫して読むことで、キラキラ音読大会を目指すことになった。工夫の点としては三つである。

- ① 声の大きさ
 - ② 読む速さ
 - ③ 体の動き
- 児童からは、「一回目は、三十センチとんだと書いてあるので、イスに跳び乗って読みたいです。」や「もつとたかくの所は、運動会の応援くらい声を出したらいいと思います。」等の意見が出た。自分なりの読み方でお話を思い浮かべながら読む姿が見られ楽しい学習であった。
(守山市立立入が丘小学校)

説明文における想像力
川端 由起

「馬のおもちゃの作り方」を二月に入ってから実践しました。「どぶつえんのじゅうい」では、京都市立動物園さんにオンラインセミナーを開いていただき、獣医さんの仕事を映像を交えながら紹介してもらいました。京都市動物園に行ったことのある児童は多く、その動物の映像を見たり、獣医さんの実際の仕事を聞くことにより、教科書の内容がより一層理解できたようでした。

「馬のおもちゃの作り方」に関して、京都市動物園からのオンラインセミナーで、子どもたちは体験（ここでは見る体験）をすることで、説明文の内容をより深く理解できました。言葉の深層部分まで理解できたかは分かりませんが、言葉の意味を少なからずは理解し、説明文の型には慣れたのではないかと考えました。そこで「馬のおもちゃの作り方」では、まず実際に教科書に記載されてある馬のおもちゃを実際に作ってみることにしました。

「先生、馬がたちません。」「ほこを4つに切ると書いてあるけど、マジックでまず線を書いておかないといがんでしまう。」というように、あちこちで教科書とらめっこしながら、子どもたちの苦戦する声が聞こえてきました。ここで、子ども達は、作り方の説明文の書き方の難しさを知るのでした。

(草津市立志津小学校)

異学年との交流
桑原 孟夢

今年度、学校で新たな取り組みとして1・2・3年生での活動が行われるようになった。1学期は、あさがおを1・3年生と一緒に植えた。3年生が1年生にどうやって植えるかを教える活動であった。また、1・2・3年生での活動としては、田植えに行き、2学期になると稲刈り、芋掘りに出かけ、自分たちが植えたものを収穫していった。こうして今までの活動を通して3年生は、年下の友達と何かを一緒にしたいという想いが芽生え始めた。

2学期の研究授業の一環として1・2・3年生でドッジビー大会をするようになった。最初は教員がフリスビーを持ち出し、遊ぶところから始まった。すると、ある3年生が興味を持ち、すごく楽しそうに遊び始めた。その児童が周りで見ている友達を巻き込み、羨ましそうに見ている1・2年生に「一緒にする？」と声をかけた。すると、笑顔で楽しそうにフリスビーをみんなで追っかける姿が校庭で見られるようになった。ここまで自分がしたことといえば、フリスビーを持ち出しただけだ。そのフリスビーを見た一人の3年生がこの先、ドッジビー大会に発展させていく。

(京都女子大学附属小学校)

